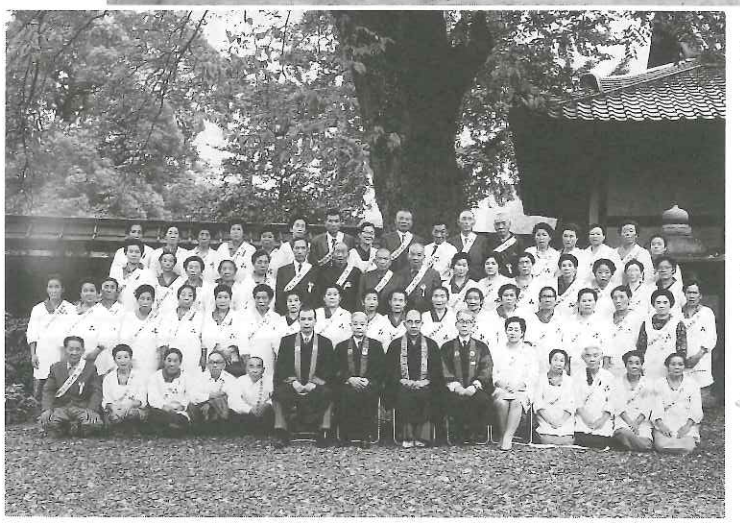
ようこそ

第　８　号
浄土真宗本願寺派
円　光　寺
〒870-0108
大分市三佐3-15-18
TEL097－527－6916
FAX097－527－6949

38年ぶりのご縁です。



（上）ご門主様（前列中央）と記念撮影（４月13日・総御堂）

（左）昭和43年の第１回円光寺念仏奉仕団（９月24日・百華園）

ご本山にお参りしました

四月十二日から十三日までの日程で、京都のご本山・西本願寺に念仏奉仕団でお参りしてきました。昭和四十三年に初めて念仏奉仕団で上山して以来、実に三十八年ぶりのことです。

同行三十五人。住職・坊守をはじめ、全員初めての念仏奉仕団です。最年長の岸田シズエさんも前回はお義父さんがお参りして留守番だったそうで、その時の記念写真には、今回参加した方のお家のおじいちゃん、おばあちゃんの懐かしい顔がたくさんあります。

十三日のご門主さまとのご面接では、「三十八年ぶりにお参りいたしました」と住職がご挨拶申し上げましたところ、少し体をのけぞらせるような仕草で驚かれたご様子のように拝見しました。

それもそのはずで、念仏奉仕団は「本願寺の清掃奉仕を通して、愛山護法の念を深め、宗祖親鸞聖人のみ教えに学ぶ」大切なご縁で、昭和二十八年からずっと続いており、今回参加の他の団体はというと、殆どが毎年の参加で、四十二回参加というお寺もありました。それで何か肩身が狭いように思っていましたが、ご門主さまからもあたたかいお言葉をかけていただき、言外に「三十八年かけて、ようこそようこそお参りされました」とのお心を思い、大変感激しました。

これも、ひとえに如来聖人の御もよおし、先人のおてまわしのご縁と、留守をまもってくださる家族のおかげさまだといただいたことです。

普段は入ることができない書院や総御堂のお掃除をさせていただき、あわせて飛雲閣など国宝や重要文化財の拝観もさせていただきました。

京都はまだ桜も残り、心やわらぐお念仏の旅になりました。

円光寺念仏奉仕団　旅のおもいで

待ちに待った円光寺念仏奉仕団の旅。四月十一日夕刻、フェリーで神戸へと出発しました。

大谷本廟

明けて十二日、京都に着いて最初に親鸞聖人のご廟所(墓所)・大谷本廟にお参りしました。そして、清水の坂を上り清水寺へ。一汗かいて頂いた抹茶アイスが「あー、おいしい」

明著堂前でお勤めをしました
(12日・大谷本廟)

ご本山で

いよいよ二日間の念仏奉仕団が始まります。お揃いのたすきをかけ、皆さん少々緊張気味。「大丈夫やろか」

開会式を待つ面々
(12日・本願寺会館)

三十五名が気持ちを合わせ終始まとまって行動できました。

清松博人総代長が持つ団旗を先頭に
移動中です

このご縁に十八名の方が帰敬式(おかみそり)を受けました。

帰敬式を終えて
(13日・総御堂)

盛り沢山のプログラムを無事終了。「もうちょっと掃除をしたかったなあ」次回もよろしく。

清掃奉仕のようす
(12日・書院)

青蓮院

親鸞聖人がお得度されたお寺で、きれいなお庭を散策し、しばし休息。続いて、都をどりを観賞。舞妓はん芸子はんの華麗な舞踊に、皆さんうっとり。「いいもの見せてもらいました」

感謝状を頂きました
(13日・本願寺会館)

比叡山

十四日。親鸞さまが九歳から二十年間仏道修行された所で、聖人のご苦労をしのびました。「冬は暗くて寒かっただろうな」

お湯につかって、美味しいものを頂き、お酒も入ってカラオケ共演の大宴会。最後は鶴崎踊りでお開きに(13日・雄琴温泉)

山科別院

蓮如上人ゆかりの本願寺別院。桜の名所で、春の風に桜の花が幾重にも舞う絶好の光景でした。「最高やなあ。これもご縁ですね」

桜のじゅうたんに桜吹雪、桜づくしの中で、思わず顔もほころびます
(14日・山科別院)

海路大分へ。十五日早朝、円光寺に帰り着きました。

八月十五日に思う

今年の八月十五日は朝から騒々しかった。テレビはどのチャンネルも小泉首相の靖国神社参拝のことで一日終始した。

八月十五日、終戦の日。今年も東京の武道館では全国戦没者追悼式が行われ、日本各地で戦争犠牲者を偲ぶ会があった。その形はそれぞれ違っても日本中の多くの人が先の戦争に思いをはせ、平和を願う静かな日である。

一方、中国や韓国、アジアの国々にとって、八月十五日は勝利と解放の喜びの日である。

日本は戦争に負けた。そして、日本は失意と絶望のどん底から立ち直り、今日の繁栄を築いた。

八月十五日は日本にとっても解放の日であり、新たな決意と出発の日でもあった。武器を捨て、もう二度と戦争はしないと誓った、その記念すべき第一歩の日であった。

戦後六十一年が経った。日本は、今や自他共に認める世界の主要国の一つになった。世界の平和と安定のために日本に課せられた責任は重い。

そうした中での小泉首相の六年続けての靖国神社参拝だった。

円光寺ではこの八月十五日に全戦没者追悼法要をお勤めし、正午より平和を願う鐘をついている。私が住職になって始めた。

平和を願う鐘つき（8月15日）

戦争責任について、全ては既に決着しており、アジア諸国にも過ちを何度も謝り賠償も十分してきているとの意見がある。今回の首相の靖国参拝も中国や韓国の言うことをきく必要はないと言う。

戦時下、私たちのお寺で何が行われたのか。当時の住職はどんな思いで、ご門徒を戦地に送り出したのだろうか。仏さまの教えに背くようなことを言い、行ってはこなかったか。

「あの時は仕方なかった」と言えるのは生き残った者だけである。戦死したご門徒は帰ってはこない。代々この寺を預かる住職として、私は仏さまにご門徒に謝り続けねばならないと思う。そして「あの時は仕方がなかった」という「あの時」が再び来ないように、ものを言い、行動しなければならないと。

同じ日、還暦を祝う会をした。昭和二十年、二十一年生まれの四人のご門徒縁者が集まった。戦後生まれが今六十歳になり、人生の大きな節目を迎えようとしている。戦争のない平和な時代を生きた人たちだ。話は子どもの頃に戻った。「あの時はよかった」と。彼らだけではあるまい。日本中が自由と希望にあふれ人間味豊かな時代であった。そして高度経済成長期を迎えた時、彼らは企業戦士となって闘った。苛酷な競争社会の中で話したくないこともあるだろう。

そして「この時代」を迎えた。自殺者が年間三万人を超え、親殺し幼児殺人など残忍な事件が続発する。地球環境の問題に、「これからどうなるのか」と言いながら、健康、グルメ、旅行に大忙しな私たちである。

「これをご縁にお寺参りを始めませんか」とすすめた。お寺参りで人生の全てが解決するわけではない。しかし、仏法聴聞する中で、今まで見えなかったものが見えてくる。聞こえなかったことが聞こえてくる。

過去の私の歩みをそのまま受け止めて、仏さまは「一緒に行こうね」と私と共に歩んでくださる。「やり直しのきかぬ人生であるが、見直すことができる」

いろいろ思う、八月十五日である。

（住職）

世々生々

サッカー・ワールドカップドイツ大会で、日本チームは一次リーグを突破できず、世界レベルとの格差を見せつけられた結果に終わってしまった。実際、初戦のオーストラリアとの試合に完敗した時点で、すべては終わっていたと言っていい◆「初戦ですべてが決まる」。テレビも新聞も、そのことを言い続けてきた。それが、いざ蓋を開けてみて、いいところがなくオーストラリアに敗れた途端、マスコミはこぞって、それでも望みがあるとあおり立てた。続くクロアチア戦で一点も取れず、世界最強のブラジルとの対戦を残すだけとなったら、まだ希望がある。神風が吹くと言った◆思い返せば、オーストラリアに日本が勝つと判断した理由は、オーストラリアは長い間大会に出ていないので、雰囲気に慣れていないからであり、ブラジルにさえ何とかなると言った根拠は、既に決勝トーナメント進出が決まっているブラジルが、手を抜いてくれるということだった◆呆れるような話だが、このような都合のいい希望的観測がまかり通っていた。かつて日本が世界中を相手にするような戦争を始め、やがて国を破滅に導いたものは、戦争指導者たちの、まったく同じ構造の思考法だったことに間違いない。

花まつり

四月八日(土)にお釈迦さまのお誕生をお祝いして、花まつり白象パレードを行いました。

円成会の皆さんの先導でパレード

降誕会

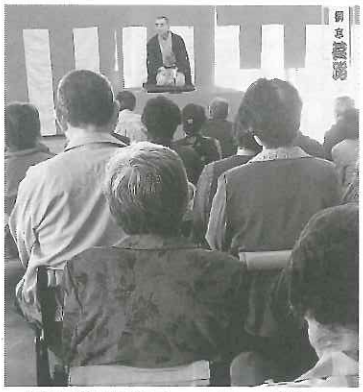
五月二十一日(日)に親鸞さまのお誕生をお祝いして降誕会をお勤めしました。初参式、バザー、フリーマーケットなど、大勢の方で終日にぎわいました。

法要後、参詣者にお祝いのもちまきをしました

第2回花まつり寄席

花まつりにあわせて、小学校新一年生を祝う会をしました。

山門特設花御堂の前で、新一年生
(左)山村しずかさん(右)鍋島かづきさん



柳亭燕路師匠の本場の落語に
大いに笑い興じました(4月8日)

初参式の子どもたち

左から、幸野しおりさん、幸野はるやさん、白木ももかさん、矢野ゆうかさん、住職、疋田あゆみさん、疋田あみかさん、橋本らいあんさん (5月21日)

清松さん、ご苦労さま。

五月の仏教婦人会総会で役員改選があり、清松勝子会長に代わり工藤喜代子さんが会長に、橋本玲子さんが副会長(会計兼務)になりました。

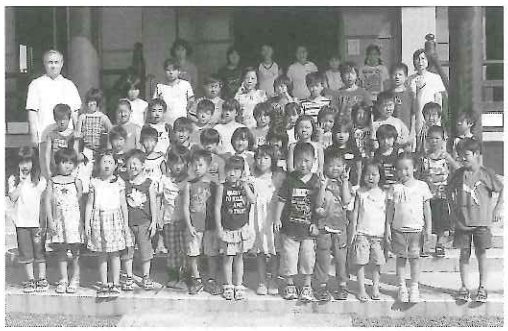
清松さんは岸田前会長と二人三脚で長年仏婦活動に、お寺のために大変ご尽力いただきました。ありがとうございました。

清松前会長を囲んで
(左)橋本副会長 (右)工藤会長

第8回盆おどり大会

門徒初盆会法要の後、皆さん汗だくで踊りました (8月12日)

第26回サマースクール



小学生47名が参加しました
(7月27日～28日)

あとがき

今回「世々生々」の欄は、大阪津村別院発行『御堂さん』(平成18年8月号)の「如是我聞」欄をそのまま転載させてもらった。読んで、本当のことが言えなくなることの怖さを思った。期待をあおるマスコミの論調、自分(国)中心の見方が裏目裏目に出て、事態はどんどん悪くなり、結果は……。

あの時、戦前の予想で、一分二敗の予選リーグ敗退を言ったら、周囲はどう言ったか。いや、言うことすらできない雰囲気がどこかにあった。

本当のことが言えなくなる。こわい話だが、まさに今の話である。